

---

# 魔族と契約した子

短剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔族と契約した子

### 【Nコード】

N9680S

### 【作者名】

短剣

### 【あらすじ】

シャナの世界に転生した主人公は神様によって2度目の転生をする。転生先にいたのは・・・

## プロローグ

「はっ？何でここに居んだ？」

今いる場所は死なない筈だった者が死んだときに来る空間だった。

「また死んだのか？」

（違うよ〜。）

「じゃあ何で俺がここに居んだよ。疫病神。」

（神様にそんな態度とれるの君だけだよ。）

「そんな事よりここに連れてきた理由を言えよ。」

（別の世界で死ぬ予定じゃない子が死んだんだよ。）

「・・・それで俺が呼ばれたのか。」

（そうだよ〜。）

「俺はかまわないけどあいつ絶対に文句言ってくるぞ。」

（がんばってね〜。）

「結局俺まかせかよ。条件がある。」

（何〜？）

「今いる世界とこれから行く世界を自由に行き来できるようにすること。」

（それぐらいならいいよ〜。）

「じゃあな。」

（バイバイ。）

## いざ別世界へ

「うつゝん。」

「起きたか。」

「アラストールおはようつてどこに居んの?」

「ここだ。」声がした方を向くと、

「なるほど、終わったんだな。何故俺がおんぶされている?」

「お前が寝てたから。」

「ふゝん。よつと。」

俺をおんぶしている少女に拳骨を喰らわせると、

「痛!!」

予想どうりの反応が返ってきた。

「お前、魔力?つてやつ込めただろ。」

「無茶してるから当然だろ。」

「無茶なんか!」

「黙ってる。無茶はさせるなって言った筈だぞ、アラストール。」

「・・・すまなかった。」

「謝るぐらいならさせるなよ・・・治ったぞ。それと、」

「何?」

「俺は一緒には行けない。」

「そう。」

「意外な反応だな。」

「お前には頼らないようにすることにした。」

「そうか。こいつを持っとけ。」

魔力を使つて大剣を作り出す。

「何?」

「お守り程度に考えとけばいい。俺が瀕死になつたり、死んだら壊れるから。」

「・・・重い。」

「馬鹿力があれば使えるだろ。」

「！このっ。」

「おっと、おっかねえ。じゃあな。」

別の世界に通じている穴に入り、俺は2度目の転生をした。

## 到着

転生に成功し、意識が戻り目を開けて見たものは・・・

「何だよこれ・・・」

死体だった。

「あら？何で生きてるのかしら？」

「はっ？」

「・・・そういうことか。」

勝手に納得せずに現状を説明してほしい。俺が片足を持たれて宙吊りになってることも。

「おい、お前誰だ？」

「やっぱり。」

「何のこと・・・うわ！」

足を引つ張られ相手を見た瞬間、固まった。

「最悪だ・・・」

相手は頭に角、背中に翼を生やしていた。

「おい。」

何か声が聞こえるけど無視だ無視。

「えい。」

「痛!!」

いきなり足を離すから受け身も取れずに頭から地面に落ちた。

「なにしゃがる！」

「無視するから。」

「ぐっ。」

「まず質問。君は誰？」

「・・・分らない。」

「ふゝん。じゃ家に戻れないね。」

「家があるのか！」

それならいったん家に戻って整理ができると思ったが、

「あつ！そういえば君に戻れる家なんかないよ。」  
「はっ？」

「まず君は人間が住む国の王様の娘で、私を殺すために兵士と一緒に来たわけ。」

「娘！！？？」

「気付いて無かったの？で、君は私を倒さないと国に戻れないの。」

「何だよそれ・・・」

「それを言っただのは君だよ。」

「俺が？」

「違うよ。君が今使っている体の人。」

「死んだのか？」

「そう。正確には私が殺した。」

「何で？」

「何も知らないんだね。私が魔王だからだよ。」

「魔王？」

「そう。君たちが勝てる訳無いのに私を倒そうと、わざわざ死にに  
来たの」

「だったら俺が倒して「無理だよ。」そんなの分かんないだらっ！」

「自分の体を見てみれば？」

「っ！」

「そんな傷だらけの体で私に勝てる訳無いじゃん。」

「だったらこれでいいだら。」

「魔力を使っただけを治す。それでも体力なんかは回復できないけど。」

「へへ。魔法が使えたんだ。」

「これで勝負できるだらっ！」

「もう一度魔力を使っただ剣を作る。」

「はっ。勝てる訳無いのに・・・来なよ。」

## 戦闘と契約

「来なよ。」

どこからか漆黒の剣を取り出した。それが開戦の合図となり、

「ふっ！」

大剣で心臓を狙うが、

「狙いが分かりやすい。」

剣でそらされてしまった。

「っ！だったら。」

距離を取り、残りの全魔力を使って大剣、双剣、槍、小刀を何万も作り、時間差をつけて全部投擲する。

「これじゃあ・・・」

焦りが見え、武器が当たった。

「はあはあ。これで終わった。」

生きていられる筈が無いと、気を抜いて油断した。その油断が命取りになるとも知らずに・・・

### SIDE魔王

自分の影から剣を取り出し、戦闘の開始を告げると、あの子は私の心臓を狙ってきた。そんなんじや私は殺せないのに。自分の剣で攻撃をそらすと、距離を取り、いろんな武器を作り、時間差をつけ全部投擲してきた。それでも私を殺すのは無理だけど、わざと焦っているように見せ、武器に当たった。

予想どおりあの子は気を抜いて油断している。相手の生死を確認しず、気を抜くのは命取りになること教えてあげよう。一瞬で距離を縮めて攻撃すると、殺気に気付いたのか、ギリギリで致命傷は避けていた。

### SIDE OUT

油断している時に背後から殺気を感じ、避けたが右腕を持っていた。油断している時に背後から殺気を感じ、避けたが右腕を持っていた。

「っゝ!!」

「戦闘中に気を抜くのは命取りになるよ。」

「どうして・・・」

「あんな攻撃じゃあ私は殺せないよ。それでも傷をつけたことは褒めてあげてもいいかな。」

「全力の攻撃で傷がつく程度かよ。（この世界に来てすぐ死ぬとは運がねえな。）」

「どうする？まだ続ける？」

「言っただろ。あれが全力だって。もう続けないよ。」

「ふゝん。だったら殺しても問題ないよね」

「クソ！（あいつに武器を渡してすぐ武器が壊れるなんてな。）」

（それは大丈夫だよ。）

（こんな時に何の用だ？）

（君が居なくなつてから数年たつてるからすぐでは無いよ。）

（はっ？時間の流れが違うのか？）

（そうだよ。それを伝えに來ただけだからじゃあね。）

「出來た」

「ちっ！殺すならさっさと殺せよ。」

「死んでもいいんだ。」

「まだ生きたいよ・・・」

「だったら契約しなさい。」

「契約？」

「そう。私と契約すればこれから生きていける。その代わり二度と国に戻れないから。」

「・・・あんた鬼だな。」

「そう？」

「そんなの契約するしかないじゃんか。」

「契約するんだ。」

「ああ。」

「じゃあこっち來て。」

「これ何だ？」地面には何か描いてあった。

「契約をするための魔法陣。」

「ふゝん・・・って何してんだよ！！」

魔王って名乗ってる奴は自分の手を体内に沈め、その手を内部で動かし、抜いた時に見えたのは骨の欠片と肉片だった。それを自分の口の中に入れ、咀嚼しながら、

「何って契約の準備。」

「・・・嫌な予感しかしないんだが？」

「その予感合ってるよ。」

「やっぱ契約しな五月蠅い。」うつ。」

いつの間にか俺の上にのしかかっていた魔王の唇が俺のに重なる。

「やっぱりあたった。（泣）重！」

「そりゃあ子供に大の大人が乗れば重いでしょ。終わったよ。」

「もう嫌だ。こんな目に会うの・・・」

「二週間だけ時間をあげる。期間内に別れの挨拶しときなさい。じやあね。」

「待て！」

そこでどこかに移動させられたのか、俺の意識が途絶えた。

## 再会

「んっ。ここ何処？」

（君の体の持ち主の領だね。）

「そうか。」

（言い忘れてたけど、私の声は君にしか聞こえないから念話使った方がよいよ。）

（そうだったな。これでいいか。）

（それと契約したから右腕はあるけど、人に見せちゃ駄目だよ。）

（何で？）

（人と魔族の中は悪いから。見られたら処刑されるね。）

（マジかよ・・・）

（でも一部の国は中立国で人と魔族が仲良く暮らしてるから見られても大丈夫だと思う。）

（それであいつにあげた大剣はどうなった？）

（壊れかけたみたいだけど大丈夫みたい。）

（よかつて・・・）

（でも、壊れかけたときにすごく慌てて面白かったよ。）

（面白くねえよ。へたに会うと殺されるな。）

（それより、誰かこっちに向かってきてるね。）

（なら話はここまでだ。説明助かったよ。）

（きみがお礼を言うなんて珍しい。じゃ、後でまた連絡するから。）

「そこにいる貴様、何者だ！」

「何者って言われてもなあ。」

俺を逃がさないように囲っているのは、ざっと15人ぐらいか。

「それなら私たちと一緒に来てもらおう。」

「ったく、せっかく家に帰ってきたのに何で着いて行かなくちゃいけないんだ？」

「何を言って・・・！お前ら武器を降ろせ。」

「隊長！」

「セラ様、気づかなかったとはいえ、私たちの無礼をお許しを。」  
「セラ様！？」

「良いよ。帰ってくるって連絡をしてなかったし。それにこれがある。あたたちの仕事なんだから気にすることないよ。」

「ありがとうございます。それでは、国王に連絡を・・・」

「そのことなんだけど、話があるから私が行くよ。」

「それでは私が護衛を。」

「いいよ、自衛は出来るから。」

「わかりました。それではお氣をつけて。」

「ありがとう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「セラが無事に帰ってきて嬉しいよ。」

「私も、兄様にまたあえて嬉しいです・・・」

「どうした？何か悩みでもあるのか？」

「父上に話すから兄様も一緒にいて。」

「分かった。」

（ちよつと、話してまさかあの事言わないでしょうね。）

（隠してるのはつらいよ。）

（確かにずっと、隠し事はしてないもんね。）

（うん。）

（それでも隠しなさい。君が死んだらあの子悲しむんじゃない？）

（そうだよね・・・）

「セラ？気分が悪いのか？」

「っ！何でもありません。」

「ならいいよ。父上、セラを連れてきました。」

「入れ。」

「失礼します。」

「セラ、此度の任務ご苦労であつた。これでやっと、魔族がおとなしくなる。」

「そのことですが・・・」

「どうした？」

「任務は失敗しました。」

## 事実

「セラ、今何と言った？」

「任務は失敗したと。」

「ならなぜ帰ってきた！この任務はお前が言いだしたことだぞ！」

「父上、セラが逃がした兵の話によると、とても太刀打ちできる相手ではないと。」

「アルクは黙っている！」

（好き勝手言われてるね。）

（勝手に言っればいいよ。それと、あのこと話すから。）

（ちよっ！まちなさ・・・）

「父上、これを。」

服をめくり、右腕を見せると、

「セラ・・・」

「任務に失敗したあげく、魔族と契約してくるとは何事だ！こんなことならあの女に手を出さねば良かった！」

「父上！」

「どういうこと？」

「っ！セラ、すまん。」

「何で兄様が謝るの？私がいけないの？」

「それは・・・」

「お前の母親は下宿の娘だ。つまり母親が違う。」

「父上！」

「っ！」

「ようやく娘が出来たと思ったら、魔法の腕前はまるつきり駄目。うまくいったとしても暴発する。私はこんな娘などいらんのだよ。」

「それがセラに冷たくあたる理由ですか？」

「それ以外にどんな理由がある？魔王を殺してくると言ったから厄介払いができたと思ったら・・・」

「っ！」

「そうですか。やっぱり私は一人ぼっちなんですね。」

「セラ、それは違う。」

「兄様、同情はいいです。虚しくなるだけですから。」

「セラ・・・」

「用が済んだのならとつとと帰れ！」

「もう我慢できない。この変態親父が！」

魔力すべてを使って殺傷能力の高いライフルを作った。

「セラ、それは・・・」

「兄様の予想どおりだよ。弾作り忘れたから作らなきゃ。」

「セラやめろ！魔力はもう無い筈だぞ！」

「だから何？」

「魔力が無い状態で魔法を使えばどうなるか知ってるだろう！」

「止めたいんなら止めれば？」

「っ！眠れ<sup>ディスプレイ</sup>」

「っ！zzzz」

「父上、今回のことは父上が原因です。」

「何故儂が悪い！誰かこいつらを捕えろ！」

「父上、無駄ですよ。」

「何故誰も動かん！」

「ウエンノルス王家王位継承権第一位アルクの名において命じる。  
父を捕えろ！」

「っ！これはどういうことだ？」

「父上の行動の結果ですよ。」

「どういうことだ？」

「セラは父上に認めてもらうためにひたすら努力をしていました。  
怪我をしてもそのまま努力をし、認めてもらおうと必死の努力をし  
ている姿を父上以外は皆知っています。そのセラに父上は何とおっ  
しゃいましたか？」

「それは・・・」

「それと、父上の独裁で領民の生活に差が出ています。」

「っ！」

「それがこの結果を生んだのです。分かったらセラに謝るための言葉でも考えていてください。私はセラを部屋に連れて行きますから。」

## 別れ

「んつ。ここは・・・」

「セラ、大丈夫か？」

「兄様・・・」

「2週間も眠っていたから心配したよ。」

「ごめんなさい・・・」

「何故謝る？」

「だって、兄様はいつも心配をしてくれてたのに魔族と契約したから。私の事嫌いだよね。」

「セラ、お前が謝る必要が何処にある？」

「だって！」

「魔族と契約した？それが何だ。」

「えっ？」

「契約してもセラはセラだろう？そんな些細なことでセラのことを嫌いになったりしないよ。」

「兄様ありがと。」

「どういたしまして。父上、いつまでも外に居ないで入ってきたらどうですか？」

「えっ。」

「アルク、私は今来たばかりだぞ？」

「そんなことはどうでもいいですから、セラに言うことがあるんじゃないんですか？」

「そうだな。セラ、こっちに来なさい。」

「はい・・・」

父親の傍に行くと

「父上？」

「セラ、すまなかった。」

そう言いながら抱きしめられた。

「セラが認められるために努力をしていたのに厄介払いができたなど・・・父親失格だな。」

「私の事怒ってないの？」

「娘の気持ちが理解できなかったのに怒ることなどできんよ。セラは私の自慢の娘だ。」

「父上・・・」

「自分の蒔いた種の後始末を娘にさせるのは不本意だが、魔王の妹が奴隷として、この国にいて、王家のことを嫌っておるからセラに魔界に連れてって欲しい。」

「分かりました。」

「セラ、これからは自分が正しいと思ったことを優先しなさい。」

「はい！」

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「まさか、吸血鬼だったとはね。」

あの後、もうこの国に戻ってこれないことを話し、奴隷商が居る場所に行き、妹を買い、（魔法で男性に変装した。）話を聞くと、吸血鬼だと言われた。

「・・・・・・・・」

「ああもう。早く迎えに来ないかな。」

今日で2週間が経つのに、まだ迎えに来ない。リナリーは何も喋ろうとしないし、この空気は耐えれないと思い始めたとき、景色が急に変わった。

「やっとか。」

「ごめん。今まで忙しくて転移させられなかった・・・リナリー！」

「お姉ちゃん？」

「リナリー、良かった。」

「やれやれ、やっと迎えが来たと思ったら無視ですか。」

「あんた、何してんの？」

「父親と和解して、この子を返してやってくれって頼まれたから一緒にいるんだが？」

「だから何で男性に変装してるのって聞いているの！！」  
「変装？」

「そつ。リナリーを買うのが女じゃおかしいだろ？だから変装してたの。」

「そう言い、変装を解くと、」

「お姉ちゃん、この人って・・・」

「そうよ。」

「姉妹で何を話してるんだ？」

「説明は後にして早く家に入りましょ。」

## 会談・・・？

「さてと。リナリーが無事に帰って来れたのはあなたのおかげよ。ありがとう。」

「礼はいいから説明してもらえろ？」

「そうね。新たな世界へようこそ、転生者君。」

「っ！何時から知ってた？」

「初めて君に会った時から。」

「リナリーは？」

「黒髪黒目は居ないから。」

「？今は黒髪黒目じゃないぞ。」

「前世の君の事を言ってるの。」

「ああ、それなら黒髪黒目だったな。」

「リナ、またミスしたの？」

「うるさい。」

「酷いわね。」

「ちよつと待て！お前の声は俺にしか聞こえないんじゃないのか？」

「こいつは例外よ。」

「友人に対して酷いんじゃない？」

「友人になつたつもりはない！」

「2人とも落ち着いて。」「あんたは黙ってなさい！」

「・・・はい。」

「ねえ。」

「？リナリーか。どうした？」

「助けてくれてありがとう。」

「どういたしまして。手遅れになる前に助けられて良かったよ。」

「しゃがんで。」

「？良いよ。」

言われた通り、しゃがむと、  
チユ。

「んな！」

「あら？」

キスされた。

「助けてくれたお礼。嫌だった？」

「そんな事はない。」

「良かった。」

「さてと。説明も済んだし、部屋に案内するわ。」

「その必要はない。」

「どうして？」

「前にいた世界に戻るから。」

「そう。」

「行っちゃうの？」

「うぐ。はあ、もう暫くの間此处に居るよ。」

「良かった♪」

「気に入られたみたいね。」

「？騒々しいな。」

「何も聞こえないけど？」「魔王様、大変です。人間達が攻めて来  
ました！！」

## 敵襲・・・？前編

「何処の国？」

「分かりません。」

「どうするんだ？」

「私が許可を出すまで攻撃をするな！」

「分かりました！」

「リナリーは此処に居て。」

「嫌だ！私も行く！」

「わがまま言わないで。」「ふむ。要は相手の様子を見るだけだろう？。」

「そうだけど・・・。」

「なら俺が出よう。」

「そんな事したらあなたほとんどの国を敵に回すよ。」

「関係無いさ。細かいことは気にしないから。」

「それでも！」

「それに原因は俺だろうしな。」

「・・・分かった、任せるわ。」

「リナリーも我慢できるよな？」

「・・・我慢する。」

「偉いぞ。じゃ行つて来るよ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9680s/>

---

魔族と契約した子

2011年11月23日15時50分発行